

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No.107 2017年6月17日発行

チェルノブイリ 31年・福島 6年 救援キャンペーン

今中哲二講演会「放射能汚染の時代をどう生きるか、子どもたちをどう守るか」

2017年4月28日 練馬文化センター小ホール（東京都練馬区）

当日は515名の方にご来場いただき会場はほぼ満席となりました。ご来場いただいたみなさま、また宣伝や当日ボランティアのみなさま、本当にありがとうございました。



講演中の今中哲二さん（上）
フルート奏者 吉原りえさん：
開演前、ボランティアでオリジナル曲を演奏（右）



ロビーの様子：受付や販売、案内係など、
30数名のボランティアの方々が参加（右）



『甲状腺手術を受けた親と子どもたちの保養』参加者たち

p.2～11 4/28 イベント報告

p.12～13 『甲状腺手術を受けた親と子どもたちの保養』（5/20～5/31 ベラルーシ「希望」にて）
報告

p.14 ウクライナ緊急支援／子どもたちの夏の保養（ベラルーシ・ウクライナ）の予定

p.15 募金状況

p.16 事務局から

★チェルノブイリ子ども基金が
ベラルーシ人道活動局から表彰★

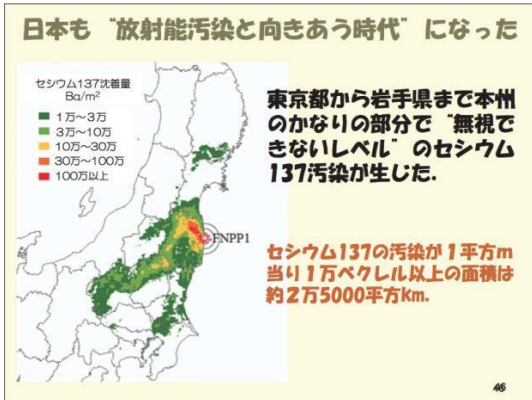
「放射能汚染の時代をどう生きるか、子どもたちをどう守るか」

4 月 28 日、チェルノブイリや福島の調査・研究を続ける京都大学原子炉実験所の今中哲二（いまなかてつじ）さんをお迎えして講演会を開きました（東京・練馬文化センター／未来の福島子ども基金共催）。金曜日の夜にもかかわらず、515 名の方にご参加いただきました。収支報告は 15 頁をご覧ください。収益はすべて、チェルノブイリと福島の子どもたちのために使わせていただきます。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

ゲスト出演くださった福島県いわき市からお子さん二人を連れて東京へ避難されているお母さんのお話と、当基金事務局長・佐々木真理、小児科医・未来の福島子ども基金代表・黒部信一の報告を抜粋してご紹介します。当基金の HP に画像をアップしますのであわせてご覧ください。

放射能汚染の時代をどう生きるか、 子どもたちをどう守るか

今中哲二（京都大学原子炉実験所研究員）



●福島原発事故は人災である

「止める・冷やす・閉じ込める」——これは原子力に携わる者にとってのスローガンです。原発における最悪の事態とは、炉心に蓄積された放射能が環境へ漏れ出すことです。何かあったら原子炉の核分裂の連鎖反応を止め、高温になった炉を冷やす。これらに失敗したときに、事故は起きます。

標準的なサイズの 100 万 kW の原発では 1 日に 3kg のウランが核分裂を起こします。

つまり 1 年間で約 1000kg、広島・長崎の原爆（約 1 kg のウランやプルトニウムが核分裂を起こした）に換算すると 1 年間で 1000 発分の核分裂生成物＝死の灰が溜まるということです。福島やチェルノブイリでは、これらの放射能が原子炉から外へ漏れ出てしまいました。

2011 年 3 月、福島第一原発は、冷却に失敗して大事故に至りました。福島原発の津波対策は 5.7m ですが、そこに 10m の津波が襲い、外部電源も非常用発電機も使えなくなりました。実は東電内部からも、10m を超える津波が来る可能性が指摘されていたにもかかわらず、それは握り潰されていたのでした（参照：「政府事故調査委員会報告」「吉田調書」他）。

一方、チェルノブイリ原発事故（1986 年 4 月）は、核分裂の制御に失敗して引き起こされた事故です。

●チェルノブイリ事故による被害

IAEA（国際原子力機関）が事故の 4 カ月後にウィーンで開いた専門家会議では、事故は

終息、たいした被害はなかったといった報告が出されました。しかしその裏では、「事を荒げない」ということで、米ソが取引をしていた。そしてこの会議以降、チェルノブイリの情報はまったく出てこなくなります（参照：『原発事故を問う』七澤潔著、岩波新書）。

チェルノブイリの周辺が高濃度の放射能に汚染されているということが地図で示されたのは、それから3年経ってからのこと。ゴルバチョフ書記長がペレストロイカ（情報公開）を進めていた時代でした。驚いたのは、原発から200～300km離れた地域にも激しく汚染された箇所があるということ。そして3年間、住民は何も知らされずに暮らしていたということです。当然、人びとは国家に対して責任を追及し、汚染対策を求める声が大きくなりますが、当のソビエト政府そのものがなくなってしまう――。

チェルノブイリ事故による汚染地域面積は145,000 km²（本州の約6割）、移住対象地域面積は約10,000 km²です。原発で大事故が起きると、周辺の人々は突然に家を追われ、地域社会が丸ごと消滅します。私は汚染の調査をしながらいつも実感します。これは事故による被害全体の一側面に過ぎない、被災者にもたらされた災難の大きさを放射線測定器で測ることはできないと。

後には、一般の人びとにも多くの放射線障害があったということを認めていたソ連共産党の秘密議事録も発掘・暴露されています（参照：『チェルノブイリ極秘』アラ・ヤロシンスカヤ著、和田あき子訳、平凡社）。

土壌汚染 セシウム 137 (kBq/m ²)		被ばく量
特別規制ゾーン	1480以上	
移住の義務ゾーン	555以上	5ミリシーベルト以上
移住の権利地域	185～555	1ミリシーベルト以上
徹底的なモニタリングゾーン	37～185	0.5～1ミリシーベルト

出典：Vladimir P. MATSKO and Tetsuji IMANAKA(1997): Legislation and Research Activity in Belarus about the Radiological Consequences of the Chernobyl Accident: Historical Review and Present Situationおよび2011年8月20日、イリーナ・ラプンスカノグリーンピース・エクセター研究所主任研究員講演より作成 3

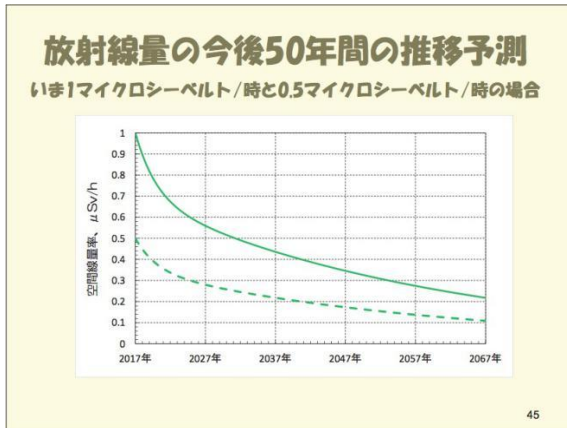
●福島、避難指示解除という問題

福島原発では、地震と津波に襲われた翌12日から1、3、4号機で水素爆発が起き、2号機では格納容器が破壊されました。14日夜から漏れ出した放射能は南へ流れ、未明に茨城を通過して東京に来たのが15日の午前10～11時頃。その後風は西向きに変わり、浪江、飯館、川俣へと流れていきました。そのときに放射能の雲（放射性プルーム）が雨や雪と重なって降り注ぎ、激しい汚染をもたらしました。

私はまず、どんな放射性物質がどのくらいのレベルで降り注いだかを調べるために、土を採取しに行きました。3月28日、29日当時、飯館村の南部にある長泥曲田（ながどろまがりた）地区の空間線量は30μSv/hでした。そこで、住民のみなさんは普通に暮らしていました。15日の夕方から夜の線量は150～200μSv/h、正直言って、私でも逃げ出すような線量です。

福島では現在、「年間20ミリシーベルトは安心・安全」「みなさん故郷に戻りましょう」というキャンペーンがはられています。飯館村のほとんどの地区もこの3月末で避難指示が解除されました。

ではそこに戻って暮らしたら、人はどのくらい被曝するのか。家屋周辺（家の入り口道路、玄関前、庭、母屋裏）の放射線量をサーベイ調査しました。例えば除染を終えた前田地区の値は0.5~1 μ Sv/hです。1 μ Sv/hの場所で大雑把に、1日のうち屋外に8時間、屋内で16時間過ごすと仮定すると、1年間で5mSv/hの被曝となります。



国が安全という「20 ミリシーベルト」というのは、私のような放射線作業従事者の年間被曝線量限度として定められているものであって、これを大人も子どもにも適用するというのはとんでもない話です。こういった場所に、戻りたくないのに戻らざるを得ないような政策を推し進めている、戻りたくない人まで無理矢理帰す、そこに避難指示解除の最大の問題はあると言えます。

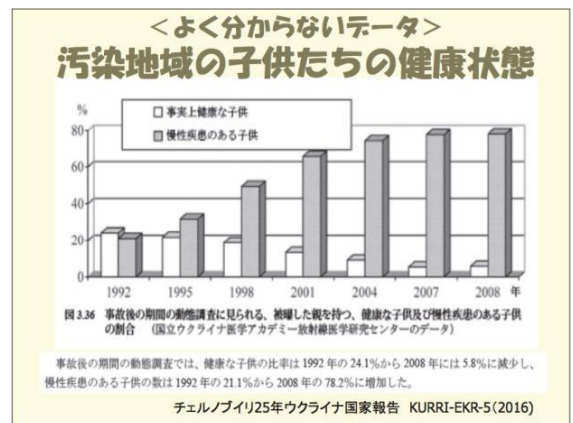
●放射能汚染と向き合って生きる

東京周辺にもかなりの汚染があります。責任は東京電力、日本政府にあり、私たちにはもちろん、「1ベクレル、1マイクロシーベルトたりともイヤだ」という権利がありますが、汚

染地域で暮らすということは、ある程度の被曝は避けられません。

しかし余計な被曝はしないほうがいい。それぞれが被曝にはリスクがあるということを承知のうえで向き合い、それぞれのやり方で折り合いをつけていくしかない。どこまでがまんするか、一般的な答えはありません。そこで、私のような専門家は、放射能汚染、被曝量、被曝リスクについて、できるだけ確かな情報を提供し、人々が自分で判断するのを手伝う役割がある。

そのなかで、子どもたちを守るためにまず必要なのは、①子どもたちの登録制度を作り、全員の被曝量を見積もること。②定期的な健康診断の実施。③近隣の汚染の少ない地域ともども、子どもたちの健康状態を追跡調査するシステムの確立。④被曝量にかかわらず、原発事故に関連する健康被害を国がケアすることの法制化。



さまざまな調査結果を見ても、チェルノブイリの子どもたちの健康は悪い状態です。いま福島県が実施している健康調査は本来、国が行うべきことです。子どもたちに多く発生

している甲状腺がんの因果関係をハッキリさせるためにはより広汎に調べることが必要で
すし、福島県だけでなく日本に住んでいる人
全部についての被曝量評価、しかるべき健康
追跡調査を国の責任で行うべきです。行政は、
「予防原則の考え方」（よくわからないこと
については、被害者の側に立って対策を立てる）
で対応していかなくてはなりません。

そして、お金の使い方を考え直すべきです。
例えば飯舘村（人口約 6,000、戸数 1,600～
1,700）の除染には約 4,000 億円が
つぎ込まれています。帰村するのは 1 割か 2 割
でしょう。若い人は戻りません。いったい何
のためのお金なのか。被災者のためでない
ことは確かです。行政の意思決定や政策
実行にかかわる役人や政治家に間違いや
不作為が疑われる場合には、第 3 者が
すみやかにヒアリングを行ない、個人
責任を問うシステムの整備も求められ
ます。

最後に、そもそも地震列島日本にこれ
だけの原発を作ったことが間違いであり、
原発を再稼働するなんてありえない、
そう私は考えます。

（※今中さんが当日ご使用になった
パワーポイントデータは当基金 HP に
アップする予定です。）

<参考>

・今中さん監修のウクライナのチェルノ
ブイリ 25 周年国家報告の全訳。

[http://www.rri.kyoto-
u.ac.jp/PUB/report/04_kr/img/ekr005.pdf](http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/PUB/report/04_kr/img/ekr005.pdf)

・京都大学原子炉実験所の研究報告

http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/PUB/report/04_kr/

「自主避難」ではない、「自力避難」

いわき市から東京へ避難しているお母さん

私は 6 年前に福島県いわき市から子ども
たちを連れて東京に避難しました。福島
第一原発から 30km 以上離れたいわ
き市に避難指示は出されませんでした。
しかし当時のいわき市にいれば、放射
線量は $20 \mu\text{Sv/h}$ を超えるなかで、
子どもの手をひいて何時間も水汲みの
列に並ばなければならなかった。そこ
から逃げることに、私は何の迷いも
ありませんでした。

しかし息子たちは当時、3 歳と 8 歳。
いきなり始まった都会の生活に慣れる
はずもなく、泣いたり吐いたりを繰
り返しました。着の身着のままの避難、
おもちゃもお菓子も福島の家にお
いたままでした。当時、上の子は
転校先の学校を嫌がって、毎朝玄
関に這いつくばっていました。それ
を抱きかかえて、無理矢理自転
車に乗せて学校へ運んだこともあり
ました。後で聞けば、ひどいいじめ
に遭っていたのですが、そのときの
私には、それに気付いてあげる
余裕もなかったのです。

そのことを息子が話してくれたのは、
この間の話題となった横浜での
避難児童いじめがきっかけでした
（※編注：2016 年 11 月、福島
原発事故で福島県から横浜市に
避難した中学 1 年の男子生徒が、
市立小学生時代に避難者である
ことを理由にいじめを受けていた
ことが発覚した）。実に 5 年も
たってからです。その間もいじめ
は断続的に続いていたのですが、
子どもは親の苦勞が見えると、
大切なことを心にしまい込んで
しまいます。そんな

ことも、避難児童いじめが悪化する要因かもしれません。

いま中学生になった息子は避難者であることを隠してやっと、いじめのない普通の生活を手に入れ、当時の状況がいじめだったのだとはっきりわかりました。けがをさせられて、痛さにくまっていたても、周りの子はただ息子を指さしてただ笑っていた。それを聞いて胸が締め付けられる思いでした。

いじめかどうかは、どんな言葉を使うか、どんなけがをするかではありません。また避難者いじめは「福島」「放射能」というワードがあるかどうかではなく、避難者のくせに生意気だとか、避難者ってなんだかずるい、そういう気持が裏にあるかどうかです。避難者という異質な存在を孤立させてどこか見下し、嘲笑する空気があるかどうかです。「放射能」の一語ではありません。

子どもたちを助けるために必要なのは、政府がいうような、放射能の安全教育ではありません。避難者いじめをなくすためには、まずは原発事故の被害を隠さず、明らかにさせることです。その悲惨さ、甚大さを、政府が明らかにすること。そして同時に、原発事故が人災で加害者がいることをはっきりさせること。そうすれば、賠償金が加害者から支払われた正統な償いのお金であることがハッキリするはずで、それをうらやむ人も、きつとなくなるでしょう。避難区域の内外を問わず、被曝を避けるために避難を続けざるを得ない人びとがいるということも理解されると思います。お金をもらってずるい、家がただでずるい、そういう大人の思いの裏に、子どもたちへのい

じめがあります。本当の加害者が隠れ続けています。あたかも被害者を加害者に仕立て上げようとするいまの政府が、きちんと加害責任を認めて原発事故を反省し、変わらなければ子どもたちへのいじめもなくならないと思います。

今村雅弘元復興大臣にいわれるまでもなく、まさしく自己責任を押しつけられてきた6年間でした。避難区域外からの避難は差別との闘いでした。賠償金もほとんどもらえない、支援物資ももらえない、医療の減免や選挙のお知らせも届かない。ときには罵倒され、頭がおかしいとまでいわれ、家族や友人からも理解されず、非難され続ける避難生活。そんな行政に由来する差別に、私たちはずっと苦しめられ続けてきました。

だから私は自分の避難を「自主避難」とはいいません。自主性なんてなかった、選択肢などもなかった。避難しなければ被曝してしまうから、やむなく避難しただけです。私たちがしてきたのは「自力避難」、差別されても支援がなくても、自力・自腹で子どもたちを被曝から守ってきたのです。

そんな私たちに唯一あったのが避難住宅でした。それも先月（2017年3月）打ち切られました。この4年間、署名を集めて県（都）や政府と交渉してきたにもかかわらず、約20,000人の避難者が住んでいた家を追い出されました。国は、「福島へ帰れ」と繰り返します。

でも、私のいわきの家はいまでも汚染されたままです。もしもいま息子が庭で泥だんごを作ったら、10,000Bq/kgを超える放射性廃棄

物になります。本来なら、国が厳重に管理しなければならぬ施設です。そんな場所へ、泥遊びが大好きな息子連れては戻れません。

子どもたちが部活をしているすぐ横では、土埃をあげながら除染が行われています。霞ヶ関のお役人はこれを、「世界に向けた新たなチャレンジです」と。あんまりです。

この3月に行われた避難住宅の追い出しは、さまざまところで残酷な爪痕を見せています。昨年、がんを切除したばかりの72歳の女性は、何度も福島県に懇願したにもかかわらず、住んでいた避難住宅を追い出され、引っ越した先の都営住宅で荷物をひもとくこともできないままにいました。無理がたたったからか視力も失い、外出もできなくなり、食材を買いに行くこともできませんでした。私が伺ったときには、病院から届けられる栄養ドリンクだけで命をつないでいました。玄関まで這うように出てこられたその女性は、お風呂に入ることができない自分を恥じて、汚れた頭にただ手ぬぐいを乗せていました。それでも訪ねてきた私を労って、そのドリンクを私に差しだそうとします。肉じゃがや豚汁を作って差し入れると、こういうものを食べるのは久しぶりだと涙を流されます。悔しくて哀しくて……。なぜそこまでして被害者を追い出して消そうとするのか。避難者は最早、この国にとっては人ではないのではないのか。そんなことまで思う哀しい日々です。

でも私たちは避難を続けます。被曝したくないから。将来この国に生まれてくる子どもたちの健康のために。一人の母親として、放射能汚染から子々孫々の遺伝子を守るために避

難したい。「福島原発被害東京訴訟」や「ひなん生活をまもる会」の活動は、そのような切なる思いをともにするお母さんたちが中心になって起こった活動です。14,000人の原告が、「原発被害者訴訟原告団全国連絡会」として新たな活動を展開しています。

放射線被曝から逃れ、健康を享受する権利は、人のいのちや健康にかかわるもっとも大切な基本的人権です。どうか私たち被害者や全国の裁判も応援してください。そして、すべての原発事故被害者の人権と将来のこの国の安全を守る闘いをみなさまと一緒に進めたいと思います。ありがとうございます。

福島原発被害東京訴訟サポーターズブログ

<http://311himawari.seesaa.net/>

ひなん生活をまもる会

<https://hinamamo.jimdo.com/>

原発被害者訴訟原告団全国連絡会

<http://www.jnep.jp/genzenren/>

チェルノブイリの子どもたちは今

佐々木真理（チェルノブイリ子ども基金事務局長）

チェルノブイリ子ども基金が設立されたのは、事故から5年後の1991年、この4月で26年目を迎えました。放射線汚染地区に暮らす病気の子どものための医薬品、医療機器、保養を支援しています。事故当時の子どもたちはもう大人になりました。それなのになぜ、私たちが今も活動を続けているのか。それは、次の世代にも被害が続いているからです。

●甲状腺がんの手術を受けた子どもたち

子ども基金は1997年よりベラルーシの保養

施設「ナデジダ（希望）」で甲状腺手術後の子どもたちの保養プロジェクトを行っています。また 2008 年からは毎年、「甲状腺手術を受けた親とその子どもたちの保養」も行っています（2015、16 年は資金難のために中止）。母親か父親のどちらかが子どもの頃に甲状腺手術を受けた 8 家族を保養に招待してきました。彼らは今もさまざまな健康上の問題を抱えています。

甲状腺を摘出してしまうと、その後は生涯、ホルモン剤を飲み続けなければなりません。2014 年の保養に参加した母親たちの多くは慢性胃炎を抱えていました。長い間の服用で胃を痛めてしまっているからです。頭痛や疲れやすさ、関節の痛みを訴え、甲状腺以外の病気を患っている人もいます。また、子どもたちにも、免疫力の低下や骨の異常、呼吸器の病気、心臓の異常などが見られます。

「ナデジダ」は、汚染地区に住む子どもたちが年間を通して学校単位で、国の予算で保養できる施設です。子どもたちは親元を離れ、先生・同級生と一緒に授業を続けながら必要な治療を受け、24 日間を過ごします。夏休みの間は、外国の NGO によるさまざまなプロジェクトも行われています。

私たちは「ナデジダ」の運営を設立当初から支援し、97 年からは保養プロジェクトを実施しています。クラブ活動やコンクール、ゲーム大会、また日本からのボランティアが開く日本文化の教室などで、病気を忘れて楽しく過ごします。ここは、つらい治療を経験した子どもたち同士が交流できる貴重な場でもありません。悩みを話し、理解してくれる仲間がいるこ

とは、大きな心の支えになります。

最初の頃は、甲状腺の病気の子どもたちを対象にしていたのですが、次第に他臓器のがんや血液の病気などが多く現れるようになり、2013 年からは、甲状腺以外の病気の子どもたちも保養に招くようになりました。

私たちは、甲状腺がんの子どもをもつ母親たちが集まり作ったベラルーシ・ゴメリの団体「困難の中の子どもたちへ希望を」を通して支援を行っています。現在は、次の世代の病気の子どもたちが会員となっています。

●病気を乗り越える力

子どもを救うためには、病気の早期発見、適切な治療・投薬・定期的検査が必要です。しかし、それ以外にも大切なことがあります。

1) 汚染のないところで安全な食事をとりながら過ごす——免疫力を高め、健康回復に効果があります。「ナデジダ」では、食べ物の放射能を測定したうえで安全なものだけを子どもに食べさせています。保養開始時と終了時に子どもたちの体内の放射能を測定し、約 1 か月間の保養で平均して体内放射能は 25～30%減ることがわかっています。

2) 心の支えを得る——これまで、保養を通して知り合った友人や先生のおかげで、生きる希望を取り戻した子どもを何人も見てきました。自分はひとりぼっちではない、分かり合える仲間がいる、支えてくれる大人たちがいるということがわかると、子どもたちは「生きよう」という希望を取り戻します。それが病気を乗り越える大きな力となります。そんな子どもたちの中からは、医師や看護師、教師となった人もたくさんいます。

3) 放射能について正しい知識を身につける——子どもたちは「ナデジダ」での保養中、放射能の影響や食べ物をはじめとして、自宅に帰ってからの生活上の注意点もしっかり学んで帰ります。

ベラルーシ・ゴメリの小児科の医師はこう言います。「まだ30年しかたっていないのだから、健康被害が続いて当然だ」。「ナデジダ」の医師は、「チェルノブイリ事故の影響は、100年は続くだろう」と。

チェルノブイリ被災地には、病気を乗り越えて懸命に生きようとする子どもたち、そして、なんとしてでも子どもを救いたいという親たちがいます。私たちはそんな彼ら・彼女らを支えるために活動を続けていきます。ぜひこれからも、チェルノブイリ被災地の状況に関心を持ち、ご支援いただければと思います。

福島の子どもたちは今

黒部信一（小児科医、未来の福島こども基金代表、保養施設「沖縄・球美の里」理事）

●チェルノブイリの後を追う福島

福島の子どもたちのからだに変化が起きています。甲状腺がんの発生、免疫力の低下、アレルギー疾患、加えて発達障害が増えています。福島から久米島の保養施設「沖縄・球美（くみ）の里」に来る子どもたちにも薬持参する子が目立ち、保養が始まってから病気になる子も出ています。

私は毎月、東京周辺に移住した子どもを対象に健康相談を行っています（「ココロとカラダを育てるハッピープロジェクト」主催）、

そこに相談に来る子どもの数は減っています。福島出身であることが知られるのを恐れて来られないという人もいますし、一概にはいえませんが、元から東京に住んでいた子どもと同じような健康状態になっているからだと考えられます。

さらに福島では大人のからだにも異変は起きているようです。血液疾患（白血病、悪性リンパ腫）、がん死、筋肉の硬くなる病気が多く出ています。これは、死因としては心筋梗塞として処理されていますが、病理解剖をしていないので真相はわかりません。

参考までに、福島の避難区域で安楽死処分を逃れて飼育されている牛を調査したところ、牛の体内に取り込まれた放射性セシウムはサーロイン、ヒレ、モモなどの筋肉に集中していました。そして調査した牛ほぼすべてが牛白血病に感染、甲状腺肥大は2頭でした。（参照：「被ばく牛調査途中報告 甲状腺肥大、牛白血病も」東京新聞、2016年9月26日付）

2017年2月20日に公表された「福島県民健康調査報告書」によると、小児甲状腺がん及び疑いの子どもは合計185人。うち手術で確定したのは145人（良性腫瘍1例を除く）でした。

甲状腺がんは、原発周辺と初期被曝を受けた子どもに多くみられます。避難指示地区13市町村だけでなく、チェルノブイリでは強制避難した汚染レベルの地区（福島市、郡山市など中通り地区10市町村）も含みます。いわき市の北部も含まれます。以上は人口も多いところですが、見つかった子どもの甲状腺がんの7割をこれらの地区で占めています。

今、子どもの甲状腺検査の縮小に向けた動きがあますが、被災者は誰も縮小も選択制にすることも望んでいません。

●子どもたちに生きる希望を

福島ではいまだに高濃度汚染地に住んでいる子どもが多くいます。チェルノブイリでは、年間 1mSv 以上の被曝量となる地域の住民には移住の権利が認められていますが、福島における基準は年間 20mSv。世界でこれまで例の無いような高い低線量被曝が福島では続く。

こうした状況の中で子どもたちに必要なのは希望です。ストレスが免疫を低下させるのとは逆に、希望は免疫を活性化します。「沖縄・球美の里」の保養の最大の目的は、沖縄の明るい海に浮かぶ島で、子どもたちに希望を持たせることです。

そしてもう一つ、いわき市の「いわき放射能市民測定室 たらちね」内に、「たらちねクリニック」がオープンします(※6月1日開所)。私も診療にあたります。内科、小児科、小児精神科……と、複数の医師で保険診療も行える本格的な診療所です。

子どもは親の拡声器です。お母さんたちが希望を持つと、子どもも希望を持ちます。子どもたちに希望を持たせましょう。親の不安は、子どもにもっと大きな不安を持たせます。親が子どもの行動を叱ったり、制限することが子どもに不安を与えます。自然にしていれば、子どもたちはのびのびと生きていきます。ほめて育てるのです。ちょうど、孫悟空が自由にしている、実はそれはお釈迦様の手の中だったというように、親の手の中で育てましょう。(参照：『予防接種のえらび方と病気にな

らない育児法』黒部信一著、現代書館)。

避難している子どもがいじめられるのは、大人社会のいじめに原因があります。まずは政府の無責任さにあります。大臣の発言、首相の発言等々。担任教師が、原発事故を理解していないということも多々あります。原発事故の被害をきちんと知った子は、いじめに加担しません。

私は病原環境論を支持しています。人は環境に適応できないときに病気になるのであるから、適応できるような環境をつくって病気にならないことを期待するという考えです。

ストレスが免疫を低下させるのと逆に、希望は免疫を活性化します。保養の最大の目的は子どもたちに希望を持たせることです。病気の自然治癒は、生活環境を変え、治ることに希望を持つことで達成されると思います。現実には、世界で 30,000 人にひとりががんを自然治癒をされていて、その 3,000 人のカルテを集めた医師がいることも事実です。余命何か月と宣告されながら長く生き続けているがんの人は生きることには希望を持っているはずですよ。

もし、希望が持てないようであれば、福島から離れてください。しかし事情がそれを許さないかもしれません。そんな離れられない親子を放射能の被害から食い止めるために、「たらちねクリニック」と「沖縄・球美の里」が応援します。私は、希望を持っています。福島の子供たちがのびのびと育ち、放射能の影響を跳ね返していくことを。

黒部信一のブログ

<http://blog.goo.ne.jp/kuroshin1941>

チェルノブイリの歌声 ～みなさまからのメッセージ～



4/28 会場来場者の感想

◆ありがとうございました。もっともっと本当の事を知り、1人1人が正しい判断をできるようにならなければいけないと思う。今の政治はまったくおそろしい。でも国民が選んだ政治家たちなのだから、恥ずかしい話だなあと思う。(40代女性) ◆今後も参加し、学んでいき、伝えていきたいと思える内容だった。自身が忘れないためにも。(20代女性) ◆事故当時のことからその後のことを、はっきり思い出せてよかったです。そして、チェルノブイリの甲状腺ガンの発生と日本での増加も、前例から知れることに目をそむけていることもよくわかりました。よかったです。もっと勉強せねば、と思いました。(50代女性) ◆被災者の方からのお話が直接聞けたのが貴重な経験でした。(50代男性) ◆今中先生の講演は、いつも明快でわかりやすいです。時間をもっとたっぷりとして、じっくり拝聴したいと思います。いわきから避難されているお母さんのトークは胸にひびきました。応援したいと思います。(50代女性) ◆マスコミでは得られない情報が色々知れて貴重なお話でした。もっと知らなくてはいけないことが、たくさんあると実感しました。被ばく者の方のお話も、大変な状況がよくわかりました。ありがとうございました。(60代) ◆この国は、戦争加害同様、負の遺産と考えられる事々には目を背けます。どこまでも、どこまでも、責任を追いかけねばなりません。私たちのあきらめないことを示していきましょう。(60代女性) ◆今中さんの話、経過や基礎知識も参考になったが、6年たった今、現在の福島の状態をどう考えたら良いかということが一番聞きたかった。最後の話にもっと時間をとってほしかった。飯館で5ミリならガマンでいいのか？リスクがあることを情報として発信してもらい、自己決定することを保障する社会的責任にも言及してほしい。子どもの被ばくに対して、責任ある対応をもっと国へ訴えて。私たちは今日の話をお

うして足を運ばないと知らされない現状がある。ひどい。(60代女性) ◆子どもたちのチェルノブイリや福祉までの事故からの放射線(被ばくによる?)が今の現状を知ることができました。(10代男性) ◆チェルノブイリ、福島の現状を知ることができた。避難している方の声を聞き、国に対して怒りがわいてきました。このようなことになってしまった原発全部が動いていなかった時でも、何とかなかったじゃないですか。再稼働反対! 脱原発! (50代女性) ◆チェルノブイリや事故後のウクライナやベラルーシ政府等の被曝者への対応、そして福島原発事故後の日本政府の対応、お話を直接聞くと、日本人として我が政府のやり方なさげなく恥ずかしい限りです。しっかり放射能汚染被曝について勉強し、一般人の私達がより賢くなり、政府に対して、人災、加害の責任をしっかりとってほしいです。また、声を上げていきたいと思います。良い企画をありがとうございます。(70代) ◆あきらめずいろんな方が調査をなさり、現実の報告をして下さり、少しでも知ることが出来有難いです。これからも続けてください。少しでも心寄り添っていただけますように。(70代女性) ◆福島がチェルノブイリの後を追っていることをすべての日本人々に知ってほしい。国と福島県が原発事故が人災であることを認め、東電にも裁判により責任を認めさせなければ前に進まない。(60代女性) ◆学者“有識者”と言われる方々に対し、誠実な(今中先生のように)広報をお願いするばかりです。(70代女性) ◆分かりやすいお話しでとてもよかったです。福島の方のお話し、本当に心にさざりました。政府がどこまでも悪すぎて、メディアや行政を利用して、世論も悪い方向へ向かわせている。私は東京に住んでいるが、当時、子どもが鼻血を出し、ぜんそくを発病した。正しい情報を国民に知らせない、イコール、戦前の日本そのもの。自分達の人権のために、動き続けたいといけなさと再確認した。子ども達にも話を聞かせたい。(40代女性)

子ども健康回復センター「希望（ナデジダ）」
ベラルーシ ミンスク州 ビレイカ地区
期間：5/20～5/31 参加者：8 家族 20 人（子ども
8 人：3～11 歳、大人 12 人：32～37 歳）



「チェルノブイリ被害者家族の保養」は、今年で 8 回目（2015・2016 年は実施なし）。参加した母親 8 人全員が、子どもの頃甲状腺の手術を受けた人たちです。6 人の母親は子どもの頃、子ども基金が「希望」で開催した“甲状腺手術後の子どものための保養”に参加しました。2 人の母親は「希望」での保養は初めてでした。15・6 年ぶりに再会した人たち、初めて会う人たちも、親子たちはみんな家族のように仲がよく、あたたかい雰囲気の中で過ごしました。

滞在中、それぞれの体調に合わせたマッサージ、水圧療法、塩治療、薬草療法、アロマテラピー等を受けました。また、子ども用の教室（絵画、陶芸、シンセサイザー）、大人用の教室（健康・衛生・児童心理に関する「希望」のスタッフによる

授業）、親子スポーツ大会などに参加しました。保養期間中はずっと天気恵まれ、周辺の森や湖に自転車が出かけたり、施設内の遊具で遊んだりして過ごしました。

参加者たちに「希望」の歴史や、エネルギー事情も知ってもらいたいと思い、施設内のエネルギー施設（太陽光パネル、木質バイオマス発電）や博物館（「希望」の歴史がわかり、子ども基金が贈ったチェルノブイリ 30 キロ圏立体地図などがある）を一緒に見学しました。

<参加者たちの感想>

オリガ・P（1983 年生まれ） ゴメリ市

ナデジダに来たのは初めて。話には聞いていたが、これほど素晴らしいところとは思わなかった。自然環境、治療、食事、設備、スタッフ、何もかも最高だった。毎日ジュースや果物が出たのがうれしかった。以前、別のところでマッサージを受けたことがあるが、ここのマッサージは全く違っていた。いろいろな治療を受けて体調がよくなった。子どもを自由にストレスなく遊ばせることができた。私は 30 歳で膝関節の病気と診断されている。私の父は、それはストロンチウムの影響だと言っている。

ナターシャ・K（1985 年生まれ） ログチョフ市

最後に「希望」で保養をしたのは 16 年前。楽しい思い出ばかり。娘（11 歳）と一緒にまた来られるとは思ってもいなかった。私の家族はブラーギン地区の高濃度汚染地からの避難民。兄も甲状腺の手術を受けている。今私が住んでいる地区の学校は保養の対象になっていない。そのため娘は生まれて初めてサナトリウムに来た。私と夫の給料ではとてもサナトリウムには行けない。こんな素晴らしい保養に招待してくれて、日本のみなさんに心より感謝します。



マリーナ・K (1983 年生まれ) ドーブルシ市

甲状腺の手術を受けたのは 17 歳の時。外国に 2 回くらい保養に行った。今回、夫、娘と 3 人で初めてこの保養所に来た。いろいろな治療を受けて体調がよくなったと感じる。常に動き回っていたはずなのに、食事がおいしくて量もたくさんだったせいか、家族全員太った。健康に関する講座、子どものクラブ活動も楽しかった。一緒に保養した仲間とも仲良くなれてよかった。



エレーナ・Z (1984 年生まれ) レチツァ市

保養に参加したおかげで、息子 (7 歳) は自分でちゃんと食べるようになり、ひとりでできることが増えた。息子はゲームもしないテレビもそれ程長く見ないのに、3 歳の時から近視と診断されて不思議に思っている。慢性扁桃炎で、心臓にも異常がある。子どもの頃に「希望」で保養をしたときに、自分のグループの担当だった職員が今でも働いていて、自分を覚えていてくれてうれしかった。

ナターシャ・M (1983 年生まれ) ゴメリ市

ここに到着した日、子どもたちは施設内のいろいろな遊具で遊びたくて、夕方まで走り回り、転んだり擦り傷を作ったりした。こんなに元気に走り回る子どもたちを見るのは初めてで、親たちは驚き、うれしい気持ちだった。「希望」のスタッフは誰も感じよく、困ったことはすぐに対応してくれた。こんな施設は他にない。宿泊した部屋も食事何もかも大満足だった。夫と息子 (8 歳) と 3 人で参加した。息子は気管支喘息で学校をよく休む。夫は背骨に問題がある。いろいろな治療を受けて、私たちは健康を回復した。日本のみなさん、ありがとうございます。



ユーリヤ・A (1984 年生まれ) レチツァ市

普段私が仕事に出ているとき、いつも息子 (5 歳) を自分の母親のところに預けている。ここではいつでも親子一緒にいられてとても幸せだった。子どものときに「希望」で保養をして、日本の里親の支援も受けていた時期があった。そして今また親子でこの保養に招待してもらい、日本の皆さんに心から感謝している。

<「希望」の職員より>

ヴェーラ・T (教育部門 部長)

とても仲の良いグループだった。子ども時代に甲状腺の手術という大変な経験をした母親たちは、何事にも積極的で前向きな姿勢だった。父親たちもみな協力的だった。これらのことも、保養の成功に果たした役割は大きい。

イリーナ・M (医療部門 部長)

日本にも多くの問題があるにも関わらず、長い間支援を続けてくださり心より感謝している。今回の参加者は、母子だけでなく、父親もみな何らかの健康上の問題があった (ベラルーシ人はほぼ全員チェルノブイリ事故の影響を受けていると思う)。保養は家族全員の健康回復に役立った。

緊急支援の報告と今後のご支援のお願い

＜緊急支援：子どもの頃に甲状腺がんの手術を受けたウクライナの女性への支援＞

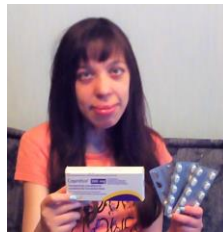
ユーリヤ（1985年生まれ）はドネツク市で生まれ、12歳で甲状腺の手術を受けました。チェルノブイリ事故被害者証明書をもっています。かつて子ども基金の「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に何度か参加しました。数年前に卵巣の手術を、3月には副腎の手術を受けました。かかりつけの国立病院では副腎の手術を行うことができず、民間の病院で高額な手術費用がかかりました。「これまで困難な問題を自分の力で乗り切ってきた。でも今度だけは自分と家族の力ではどうにもできない」とユーリヤは訴えました。子ども基金は3月に検査費用として360ドル、5月に医薬品費用として4900ドルを支援しました。

手術前の2月に届いた連絡。「私の場合、“髄様性甲状腺がん”という稀なタイプの甲状腺がんです。転移がゆっくり進みます。肝臓、副腎などが影響を受けています。鎖骨にも転移がみつかりました。甲状腺は12歳の時からありません（手術で切除したため）。これからは2つの副腎もなくなります。手術後は、副腎の代わりにする薬を飲むこととなります。本当は2つの手術（副腎と、髄質癌腫）は、一度に行った方がよいそうです。しかし一度に2つの手術を受けるには、私の体がもたないだろうということです。それで、最初の手術後、回復を待ち、2か月から半年後に2つ目の手術をする予定です」

副腎の手術後には、医薬品による治療が望まれました。「転移のあるすべての臓器を取ることはできず、自分のタイプのがんの場合は

放射線治療も役には立たない、と医師から説明されました。がんが大きくなるのを抑える唯一の薬があると知りました。ただその薬は大変高額で、ウクライナでは未承認のため、病院で処方してもらえません。でも私が助かる方法は今のところこの薬だけなのです」

その後、キエフ市内にドイツ製のこの薬を販売している薬局があることがわかり、子ども基金が支援した費用で薬を購入することができました（保険外自費）。ユーリヤは、手術を受けた病院の医師の管理の下、5月21日から服用を始めています。次号でもその後の様子をお伝えします。（薬を手にするユーリヤ。5月30日に送られてきた写真）



ら服用を始めています。次号でもその後の様子をお伝えします。（薬を手にするユーリヤ。5月30日に送られてきた写真）

★子どもたちの夏の保養★ ウクライナ・ベラルーシ

今年も下記のとおり保養を開催します。
ご支援をよろしくお願いいたします。

【ウクライナ】6/2～6/13 保養施設「デリフィン」（ヘルソン州ゴロプリスタン地区）子ども43人（8～16歳：呼吸器・鼻咽頭の病気、肝臓機能障害の子ども）と引率者3人／子ども一人当たりの滞在費 15.15ドル×46人×12日間

【ベラルーシ】8/3～8/26 子ども健康回復センター「希望」（ミンスク州ビレイカ地区）子ども28人（8～17歳：腫瘍病、血液病、リンパ系の病気の子どもの）と引率者2人／子ども一人当たりの滞在費 18.18ドル×30人×24日間





募金・救援状況



●募金状況

2017年2月～5月

(単位:円)

募金件数	158件	94件	69件	45件
救援寄付金	524,480	343,503	1,184,148	1,535,402
保養費	66,500	112,000	75,000	78,000
特別保養費	35,000	0	0	0
里子支援	45,720	223,620	13,080	69,378
ニュース購読費	52,000	48,000	34,000	12,000
治療費支援	1,000	0	8,000	0
イベント賛同金・会場募金	73,000	34,000	112,832	5,000
合計	797,700	761,123	1,427,060	1,699,780

*4月救援寄付金には、(株)カタログハウス様より運営費としての募金100万円を含みます。

*その他、切手、ハガキなどのご寄付をいただきました。

●募金団体名一覧 (順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【2月】東京一般労働組合 東京音楽大学分会／北陸学院高等学校・中学校／ケイ歯科クリニック／覚正寺／高山別院 飛騨仏教青年会【3月】若松栄町協会内 One Voice AIZU 実行委員会／(株)音楽センター(印税)

【4月】日本ウクライナ文化交流協会／(株)カタログハウス／浄土真宗西嘉穂組【5月】おはなしのいえ

●救援状況

2017年2月～5月

(単位:円)

<ウクライナ>

◎子どもたちの生存	
特別保養費	1,137,400
現地銀行手数料	3,412
◎緊急支援(ウクライナの女性の治療費支援)※1	597,905
現地銀行手数料	6,793

<ベラルーシ>

◎「希望」	
家族保養(17年5月21日～31日)実施費用 ※2	659,552
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
里子支援3人(17年1-6月)	101,862
スタッフ給料4人(2017年1～12月分)	277,824
車修理代	46,304
家族保養バス代	76,480
◎チェルノブイリのサイン	
里子支援2人(17年1～12月／17年月4～18年3月分)	138,756
スタッフ給料(17年1～12月分)	8,103

※1: 14頁に報告。 ※2: 12・13頁に報告。

チェルノブイリ31周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
入場料	451,500	会場費	79,200
賛同金	138,000	舞台費	10,000
会場募金	84,832	ゲスト招聘費	35,970
物販益	19,452	印刷費	73,835
		発送費	291,892
		事務費	28,158
		交通費	13,038
		物販手数料	2,000
小計	693,784	小計	534,093
		収益	159,691
合計	693,784	合計	693,784
募金を含む収益金 159,691円			
多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを深くお礼を申し上げます。			
♥チェルノブイリの子どもたちへの支援		111,784円	
♥福島の子もたちへの支援		47,989円	
収益金は以上のようにさせていただきました。			

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

- (1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金
- (2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)
- 預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリ子ども基金
- (3)三菱東京UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)
- 口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

*** 2017年版チェルノブイリ救援カレンダー ***

収益金 1,448,441円 (5/31現在)

多くの皆様のご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。上記のうち、289,688円を福島の子もへへの支援といたしました。

~~~~~  
※イベント・カレンダー収益とも、福島の子もへへの支援は「未来の福島子ども基金」を通して活用されます。

<http://fukushimachildrensfund.org/>

# 事務局から

## ■チェルノブイリ子ども基金がベラルーシ人道活動局から表彰



チェルノブイリ事故30年の昨年、表彰されました。5月にベラルーシ「希望」訪問の際、マクシンスキー所長より事務局長の佐々木に手渡されました。

### 表彰状

ベラルーシ共和国大統領  
総務庁人道活動局

チェルノブイリ子ども基金殿

チェルノブイリ原子力発電所事故被災地に居住する児童の健康維持・強化に向けられた人間愛、慈愛と長年に亘る国際協力を表彰します。

ベラルーシ共和国大統領  
総務庁人道活動局局长  
V. A. スカケン

2016年

## ■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回予定 10/21(土)午後1時~4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階) ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

## ■「基金ニュースレター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。またニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)

\*\*\* ご協力いただいているみなさまへ \*\*\*  
振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

**すべての方に振込用紙を同封しております**  
事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

### 「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書が入り用の際はお申し出ください。

## チェルノブイリ子ども基金

第8期理事会 2017年4月~2019年3月

共同代表理事: 向井雪子 小寺隆幸 佐々木真理

理事: 大戸清一 齋藤武光 中務俊之

監事: 清水玲子 鈴木由利子

顧問: 黒部信一

★今期より3人の共同代表理事となります。事務局長はこれまでどおり佐々木真理が務めます。これからもどうぞよろしくお祈りいたします。

★編集後記★ 事務局が練馬区に引っ越してから2年目の今年4月イベントは、昨年に続き練馬文化センターで開催。イベントの宣伝に練馬区内の個人・団体の方々、



また他の地域の方々にも大変お世話になりました。これからもみなさまとのつながりを大切にしたいと思います。どうぞよろしくお祈りいたします。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。